

『徒然草』第二五段の研究

● 土 屋 博 映

一、はじめに

『徒然草』第二五段は、従来、「無常観」を表すものの代表とされてきた。本書は、基本原則として、冒頭の第一段から、順番に記述されたものと考えられている。その通説にしたがえば、本段を記述する原因（流れ）は、それまでの各段に存在し、本段の存在が、それ以後の各段に結果（影響）を及ぼしているということになる。本段の重要性は、本書に無常観が最初に出現するというところにある。

そこで、本稿では、第一に、本段は、それ以前の各段の、いかなる思考の変遷を経て成立したのかということを追及する。本書はまた、全体が「無常観」に覆われているとも考えられる、そのきっかけが本段であり、それはどうして成立するに至ったかを検討したいわけである。

次に、本段は、それ以降の各段に、どのような影響を与えているかを追求する。本段で確立された（と思われる）「無常観」が、本書が記述されるにともない、どの様に完成していったのか、その手掛かりとなる部分を検討してみたいと考えている。

二、本文の検討

1、本文全文^(注1)

①飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、楽しみ・悲しび行きかひて、はなやかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変わらぬ住家は人あらたまりぬ。②桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん。③まして、見ぬいにしへのやんごとなかりけん跡のみぞ、いとほかなき。

④京極殿・法成寺など見るこそ、志留まり事変じにけるさまは、あはれなれ。⑤御堂殿の造りみがかせ給ひて、庄園おほく寄せられ、我が御族のみ、御門の御後見、世の固めて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんとはおぼしてんや。大門・金堂など、近くまで有りしかど、正和の比、南門は焼けぬ。⑥金堂はその後倒れ伏したるままにて、とり立つるわざもなし。⑦無量寿院ばかりぞ、そのかたとて残りたる、丈六の仏九体、いと尊くて並びおはします。⑧行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。⑨法華堂なども、いまだ待るめり。是も又、いつまでかあらん。⑩かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。

⑪されば万に見ざらん世までも思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。（※①～⑪は筆者による）

本段は、一見してわかるように三段落から成立している。

第一段落は、「常ならぬ世」とあるごとく。この世は「無常」であることを一般論として述べる。

第二段落は、「京極殿・法成寺」「御堂殿」などの具体例から、「無常」の世を示す。

第三段落は、一文である。冒頭に「されば」があるように、結論である。

この世の「無常」を主題に、どんなに高貴なものでも必ず滅びるものであるということをも具体例で示し、最後に、自分の死後まであれこれ思いを及ぼすのは、むなしいことを述べてまとめる、そういう構成になっている。

したがって、主張したいのは、⑩である。

2、各文の検討

①飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、楽しみ・悲しび行きかひて、はなやかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変わらぬ住家は人あらたまりぬ。

「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世」とは、有名な古歌「世の中は何か常なる飛鳥川 昨日の淵ぞ今日は瀬になる」(古今集)をふまえたものである。時の流れに世の中は変化し、住居は滅び、住む人も変わるといふ、『方丈記』をしのばせるような内容である。

②桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん。

「桃李もの言はねば〜」は、『和漢朗詠集』による。①に続き、文学の世界から、「無常」についてふれている。「誰とともにか昔を語らん」は、「無常」の世であるから、昔を語ることはできないというのである。

③まして、見ぬいにしへのやんごとなかりけん跡のみぞ、いとほかなき。

「まして」とあるので、前と比較しているのであるが、②と比較したのでは、比較にならないので、①と比較していることになる。「はなやかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変わらぬ住家は人あらたまりぬ」がその対象であり、「いにしへのやんごとなかりけん跡」は、それにもまして「いとほかなき」だということである。

④京極殿・法成寺など見るこそ、志留まり事変じにけるさまは、あはれなれ。

③の具体例が④である。「京極殿・法成寺」の「事変じにけるさま」が「あはれなれ」だということである。「京極殿・法成寺」いずれも藤原道長の住居跡である。

⑤御堂殿の造りみがかせ給ひて、庄園おほく寄せられ、我が御族のみ、御門の御後見、世の固めて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんとはおぼしてんや。大門・金堂など、近くまで有りしかど、正和の比、南門は焼けぬ。

④の道長邸の様子を受ける。「御堂殿」とはもちろん道長のこと。華やかな栄華を築いた道長は、「かばかりあせ果てんとはおぼしてんや」と、道長の生前の気持ちを推し量る。作者の主眼はここにある。「大門・金堂」「南門」について、もとの面影もないということである。

このあたりは『平家物語』をふまえているかのようである。

⑥金堂はその後倒れ伏したるままにて、とり立つるわざもなし。

前述⑤の「金堂」の昔の面影のかけらもない様子を記す。

⑦無量寿院ばかりぞ、そのかたとて残りたる、丈六の仏九体、いと尊くて並びおはします。

前述⑤を受ける。「無量寿院」は法成寺の阿弥陀堂のことであり、これだけは残存しているの

である。「丈六の仏九体、いと尊くて並びおはします」は、昔の栄華をわずかに偲ばせる部分を描き出している。

⑧行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。

⑦を受ける。「丈六の仏九体」に加え、「行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆる」のが「あはれなる」というのである。

⑨法華堂なども、いまだ侍るめり。是も又、いつまでかあらん。

⑧を受ける。「法華堂」もまだ残存している。主張したいのは「是も又、いつまでかあらん」である。栄華の跡をかりうじて残している⑦⑧を受けて、それもいつかは消えて行くという「無常観」でまとめているのである。

⑩かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。

⑨を受ける。「かばかりの名残だになき所々」の「かばかり」は⑥以下を指示しているのだろうか。ここでの主眼は「さだかに知れる人もなし」である。道長邸のほとんどは、痕跡があったとしても、はっきり知っている人もいないというのである。

⑪されば万に見ざらん世までも思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

全体のまとめとなる。「されば」で結論を導く。「万に見ざらん世までも思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ」と主張するのである。

本段の構成を再確認する。

第一段落は①～③で、文学作品を利用して、「無常」な世の中を導く。また、③は第二段落の具体例を導く役割も果たしている。

第二段落は④～⑩で、栄華の盛りの道長の「常住」の心情を思いやり、その心情が、現在、まったくと言っていいほど活かされていないことを具体例で示している。

第三段落は⑪。結論である。本段の主張はここに凝縮されている。「常住」は「無常」には勝てないというまとめかたであると言っておこう。この世は無常、という「無常観」を、作者の人生観として示しているのである。

三、各説の検討

1、「全集」^(注2)

「全集」頭注には、次のように記されている。

無常の世に将来を計画することが、いかにはかないものであるか。それを実証する道長の遺跡に対して、「はかなし」「あはれなる」という表現で応じていることからしても、この段における兼好の感慨の質は、長明の『方丈記』のそれに近い、かなり詠嘆的なものであるといえよう。

(全集)

全体的に異論はない。ただ「かなり詠嘆的なもの」と安易に言ってもよいものか、「はかなし」「あはれなる」はそんなに詠嘆の気持ちをこめているものだろうかという疑問は残る。

2、「全注釈 上」^(注3)

「全注釈」解釈には、次のように記されている。

三つの段落から成っているのであるが、そのうち、第三が中心をなして、第一はその序にあたり、第三は添加された感想にすぎない。主題は、第二段落の、ことに、「京極殿・法成寺など見るこそ、志留まり、事変じにけるさまはあはれなれ」の句に顕現している。そして中心が、「法成寺」にあることは、以下の叙述によって明らかである。こういう三つの段落で同じような構想力を示しているものとしては、第一八段が前にあった。(全注釈)

大いに異論がある。とくに傍線部「第三は添加された感想にすぎない」は肯定できない。「第三」は「感想」というような軽いものではない。「されば」がそれを示している。そして、また傍線部「主題は、第二段落の、ことに、『京極殿・法成寺などは見るこそ、志留まり、事変じにけるさまはあはれなれ』の句に顕現している」も納得いかない。これは具体例として記したのであり、あくまでも主題は抽象のレベルを上げた内容の「第三」、「⑩されば万に見ざらん世までも思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ」にあるのである。(※傍線は筆者による。以下同じ)

3、「諸注」^(注4)

「諸注集成」には、次のように記されている。

この段の最初の部分が、平家物語（巻三、少将都帰りの事）を粉本としたものであることは、まぎれもないと思われるが、橘氏は、「四行の間に、古今集、仮名序、陳鴻の長恨歌伝の中の句、和漢朗詠集の古詩古歌を引用して、韻文的情調を漂わせている」と激賞された。しかし、これは、平家物語に与えるべき評語であって、的外れである。(諸注)

全体的に見るべきものはない。古典を背景に「無常観」を主題としていることは明らかで、「韻文的情調を漂わせている」もおかしいが、「これは、平家物語に与えるべき評語であって、的外れである」というような評価も「的外れ」である。

4、「講座 第二巻」^(注5)

「講座」には、次のように記されている。

『寿命院抄』や『野槌』がいうように、古今集・同序・史記・後漢書・菅三品詩などから引いた詩や歌が本段の背景にあることは間違いない。そして兼好は京極殿や法成寺の興廢をその目に見ているのである。世は無常である。それは誰の力をもってしてもどうすることもできない。飛鳥川がこの事実を目のあたりに見せてくれた川であり、人々に与えた感銘も深い。(中略)

兼好はこうした無常感にひた押しに押し切られて、「さればよろづに見ざらむ世までも思ひおきてむことこそはかなかるべけれ」といっている。(講座)

前半はなかなかだが、後半の「兼好はこうした無常感にひた押しに押し切られて」とは、何をかいわんやである。「押し切られて」ではなくて「押し切って」であろう。

5、「研究と講説」^(注6)

「研究と講説」には、次のように記されている。

道長の往時の栄華をしのぶよすがもない、法成寺の荒廢した建造物の前にたたずんだ兼好は、無常の力に支配された現実の世界をありのままに諦観する。人間の営為が歴史という進行のなかで、無惨に風化していく過程を「いとほかなき」と観取するのである。兼好はそこに存在の

「はかなさ」を確認するのであるが、それは慟哭の姿ではない。はかなさははかなさとして受けとめる立場に自らを立たしめている。(中略)

結章としての「されば、よろづに、見ざらん世までを思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。」と呟く兼好の批評は、存在としての人間の営為の「はかなさ」を指摘するだけにとどまらず、人間の生き方の根底を律する無常に対処する、英知の働きを求める、兼好の人生哲学が隠微な形で表白されているのではなかろうか。(研究と講説)

大体において認めたい。とくに傍線部分は、その通りであると思う。ただ最後の部分の、「兼好の人生哲学が隠微な形で表白されているのではなかろうか」の「隠微」とは不適格な表現であろう。

四、前後の段の検討

1、何事も、古き世のみぞしたはしき。今様は、無下にいやしくこそ成りゆくめれ。かの木の道の匠の造れる、うつくしきうつは物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

文の詞などぞ、昔の反故どもはいみじき。ただいふ言葉も、口をしうこそなりもてゆくなれ。いにしへは、「車もたげよ」、「火かかげよ」、とこそいひしを、今様の人は、「もてあげよ」、「かきあげよ」といふ。「主殿寮人数だて」と言ふべきを、「たちあかししろくせよ」と言ひ、最勝講の御聴聞所なるをば、「御講の蘆」とこそ言ふを、「かうろ」と言ふ、くちをしとぞ、古き人はおほせられし。(第二二段)

傍線部分、「古き世」「今様」「古代」「昔」「古き人」などと、今昔を示す言葉は、第二五段と重なり、そのまますべてというわけではないが、関連は認められる。ただ、本段は、昔との比較で、現代を嘆き、古代にあこがれているのではあるが。

2、衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ、世づかず、めでたきものなれ。

露台・朝がれひ・何殿・何門などは、いみじとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき小藪・小板敷・高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。「陣に夜の設せよ」といふこそいみじけれ。夜御殿のをば、「かいたもしとうよ」などいふ、まためでたし。上卿の、陣にて事おこなへるさまは更なり、諸司の下人どもの、したり顔に、なれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、ここかしこに睡り居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴のおとは、めでたく優なるものなり」とぞ、徳大寺太政大臣はおほせられける。(第二三段)

傍線部分、「衰へたる末の世」と言い、昔と比較した今(末の世)を記すところに第二五段との関連性がある。ただし、本段は、「衰へたる末の世」ではあるが、「九重」は昔ながらでよいというのである。

3、齊王の、野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事のかぎりとは覚えしか。「経」・「仏」など忌みて、「なかご」、「染紙」などいふなるもをかし。

すべて神の社こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもただならぬに、玉垣しわたして、榊木に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布祢・吉田・大原野・松尾・梅宮。(第二四段)

傍線部分、「齊王」「神の社」などと、第二三段を受けて、天皇や神社のすばらしさを述べる。これは2で述べた、『衰へたる末の世』ではあるが、『九重』は昔ながらでよいということと同

じである。

4、飛鳥川の淵瀬ならぬ世にしあれば、時うつり、事さり、樂しび・悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰とともにか昔を語らん。まして、見ぬいにしへのやん事なかりけん跡のみぞ、いとはかなき。

京極殿・法成寺など見るこそ、志とどまり事変じにけるさまは、あはれなれ。御堂の作りみがかせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和の比、南門は焼けぬ。金堂はそののち倒れふしたるままにて、とりたつるわざもなし。無量寿院ばかりぞ、そのかたとて残りたる。丈六の仏九体、いと尊くてならびおはします。行成大納言の額書ける扉、なほあざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども、いまだ待るめり。これもまた、いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづからあやしき礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。

されば、万に見ざらん世までを思ひ掬てんこそ、はかなかるべけれ。(第二五段)

再確認であるが、本段は、「飛鳥川」という川を文学作品から導き、この世は無常だという主題を導き、具体例として藤原道長の邸宅「京極殿・法成寺」をあげ、最後に「万に見ざらん世までを思ひ掬てんこそ、はかなかるべけれ」という無常観を結論として導いているのである。

それ以前の段、ここでは、第二二段からを見てきたが、関連性は認められるが、一貫してのまとまりといった強いつながりはない。したがって、第二四段まででいったん思考の流れはまとまり、新たな見地から本段が記されたものと考えられる。

5、風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きしことの葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。

されば、白き糸の染まん事を悲しび、路のちまたのわかれん事をなげく人もありけんかし。堀川院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が垣根は荒れにけり

つばなまじりの莖のみして

さびしきけしき、さる事侍りけん。(第二六段)

冒頭の「風も吹きあへずうつろふ人」という表現もそうだが、傍線部分、「我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ」は、内容から、「我が世の外になりゆく」「亡き人のわかれよりも」「かなしき」という表現から、無常観を述べていることは明らかであり、第二五段との強い関連が見てとれる。「されば」以下の傍線部も同様である。さらに「むかし見し」の歌は、無常観そのものの歌である。

6、御国ゆづりの節会おこなはれて、劍・璽・内侍所わたり奉らるるほどこそ、限なう心ぼそけれ。

新院のおりゐさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや、

殿守のとものみやつこよそにして

はらはぬ庭に花ぞ散りしく。

今の世のこと繁きにまぎれて、院にはまるる人もなきぞさびしげなる。かかる折にぞ、人の心も

あらはれぬべき。(第二七段)

傍線部分、「御国ゆづりの節会」により、「新院」が帝位を去った心細さが記される。その後、和歌が記されるのは、第二六段と同様であり、新院の寂しさが描かれる。無常観の具体例と云っていい。

7、諒闇の年ばかりあはれなる事はあらし。

椅櫛の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけて、布の帽額あらあらしく、御調度どもおろそかに、皆人の装束、太刀・平緒まで、ことやうなるぞゆゆしき。(第二八段)

傍線部分、「諒闇の年」は、天皇が父母の裳に服される年のことをいう。無常の具体例として、第二五段との関連を認めたい。

8、しづかに思へば、よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき。

人静まりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりしたため、残しおかじと思ふ反古など破りすすつる中に、亡き人の手ならひ、絵かきすさびたる見出でたるこそ、ただその折の心地すれ。この比ある人の文だに、久しく成りて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくて変らず久しき、いと悲し。

(第二九段)

傍線部分、「よろづに過ぎにしかたの恋しさ」「亡き人の手ならひ」「いと悲し」など、無常観にあふれている。昔が恋しい気持ち、亡き人の思い出の品、それらの例が、この世の無常を表現している。第二五段との関連を認めたい。

9、人のなきあとばかり悲しきはなし。

中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく狭き所にあまたあひみて、後のわざども営みあへる、心あわたたし。日かずのはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日は、いと情けなう、たがひに言ふ事もなく、我かしこげに物ひきしたため、ちりぢりに行きあかれぬ。もとのすみかに帰りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。「しかしかのことは、あなかしこ、跡のため忌むなる事ぞ」など言へるこそ、かばかりのなかに何かはと、人の心はなほうたておぼゆれ。

年月経ても、露忘るるにはあらねど、去る者は日々に疎しといへることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覚えぬにや、よしなしごと言ひてうちも笑ひぬ。からはけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつつ見れば、ほどなく卒塔婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。

思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そもまたほどなくうせて、聞きつたふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年をまたで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき。(第三〇段)

本段の主旨は、冒頭の傍線部分、「人のなきあとばかり悲しきはなし」と末尾の傍線部分、「はては、嵐にむせびし松も千年をまたで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき」につきると云ってよい。

冒頭で、人の死の悲しさ、つまり「無常」を述べ、次に人の死が時の流れにより、どんどん薄れて行く悲しさを述べ、末尾で最終的に「古き墳」までが「その形だになくなりぬるぞ悲しき」とまとめる。つまり、まさに、人の世の「無常」を主張している。無常観のまとめとして、第二

五段との関連性の強さを認めたい。

五、結論

実は本稿の前に「第二二段」につき論文を上梓した(注7)。その中で、第二五段につき、言及しているので、その個所をまず取り上げておく。

「第二五段は、本文中、最初に『無常観』を示す段として有名である。直前の第二四段まで現世に幻滅感を抱いていた作者は、いにしえにあこがれた。そこで立ち止まったのがこの第二五段であると考えたい。冒頭の傍線部「飛鳥川の～」と「桃李ものいはねば～」は世の中の変化が空間的に把握されて、『方丈記』の冒頭部分をオーバーラップさせるかのごとくである。

本稿では、第二五段については、第二四段までの流れを受けて成立したろうことを述べるにとどめ、別の機会に考えを公にしたい。言えることは、それまでの流れをうけてはいても、ここで振り返って新たな思想に到達した意味合いが深いということである。作者の思想の遍歴として、重要な段といえるだろう。」

この傍線部に記した部分につき、本稿をまとめている今も、大きな考えの変化はない。これを前提に、「結論」をまとめていきたい。

本段の前後の関連性について、検討を加えた、それを中心にまとめていく。

本段以前の段は、「いにしへ」「むかし」へのあこがれが述べられていた。ところが、本段は、「飛鳥川」という、古来「無常」の代表とされる和歌などを引用し、あこがれの昔を語ることはできないと言い、昔の貴人が住んだ遺跡は「はかなき」として、あこがれを否定するばかりである。

つまり、第二四段と本段との間には、思想的に、大きな隔たりがあるということである。

その気持ちにさせたのが、藤原道長の遺跡である。本段は三段落から成り立っているが、第一段落は「はかなし」という言葉でまとめている。第二段落は「あはれなり」を2回用い、藤原氏の遺跡を具体的にあげている。第三段落ではまた「はかなし」という言葉でまとめている。

本段の主眼はどこにあるかという点、第三段落であろう。「されば」で始まることがそれを示している。主張したいのは、貴人道長の遺跡の荒廃から、「よろづに見ざらん世までを思ひおきてん(こと)」の否定である。

「無常」を本格的に見つめた段として、やはり、本書でも最重要な段と言えよう。

本段以降は、この「無常」の流れが第三〇段まで続いていき、第三一段から、「無常」を悲しむ姿勢から、冷静に「無常」を見つめる姿勢へと変化していくのである。

結論として、第二五段から第三〇段までは、相当関連性が深く、同時期に、連続して書かれた可能性が高いと言える。

最後に、「無常」に本格的に取り組んだ段として、本段が非常に重要であることを、再度強調しておきたい。

(注1) 日本古典文学全集『徒然草』(小学館)

(注2) 同上

(注3) 『徒然草 全注釈 上』(角川書店)

(注4) 『徒然草 諸注集成』(右文書院)

(注5) 『講座 徒然草 第二巻』(有精堂)

(注6)『徒然草 研究と講説』(桜楓社)

(注7)『コミュニケーション文化 第12号』(跡見学園女子大学 コミュニケーション文化学科紀要 所収)